

Asia Pacific Week (豪州・オーストラリア国立大学)に関する報告(参加レポート集)

2010 年4 月27 日 関西学院大学大学院社会学研究科 大学院GP 事務室

■ 1. 目的とスケジュール ■

以下のスケジュールで、キャンベラにおいて大学院生の学術交流とネットワーキングを狙いとしたサマースクールに参加した。

○ 目的:

Asia Pacific Week は中国研究、日本研究、インドネシア研究、南アジア研究、東南アジア研究、環太平洋地域研究という、計6つのアジア太平洋地域研究の分会、およびそれらを横断する共通企画・公開講義から構成されている。このうちわれわれの参加したのはこのうち日本研究分会(Japanese Studies Graduate Summer School)、そして共通企画・公開講義である。

「summer school」と通称されているとおり、これはあくまで参加者の大学院生が中心となるワークショップである。今回は、各研究分会について日本研究(51人)、環太平洋地域研究(32人)、中国研究(26人)、インドネシア研究(23人)、東南アジア研究(20人)、南アジア研究(19人)、合計171人の大学院生が各地から参加している。日本研究分会での研究報告は36本であった(共同セッションにおける他分会からの発表も一部ふくむ)。参加者らは会場での報告と討論のほかにも、期間中大学の寮に宿泊し日常的な交流をおこなう。そうしたなかで、将来につながるネットワークも広がっていくかもしれない、というしくみである。

すべての研究報告と講義は英語でおこなわれる。質疑応答や討論も基本的に英語が使用されるが、日本語を理解する参加者も多かったため、議論への参加ハードルを調整するために日本語での質疑や討論も、そのつど会場でのスタッフや参加者のアシストによって可能となっていた。

○ 人員(KGメンバー):

松村淳、稲津秀樹、谷村要、中川千草(GP事務室)、柴田由妃(GP事務室)、川端浩平(GP特任助教)、白石壮一郎(GP特任助教)

○ スケジュール:

研究集会名: Asia Pacific Week(APW)

研究分会名: Japanese Studies Graduate Summer School

開催期間: 2010年2月8日~11日

開催者: The Australian National University

=2月6日(土)~2月7日(日)=

- ・関西国際空港からキャンベラへ移動。
- ・宿泊:オーストラリア国立大学学生寮(Liversidge Court, University House, John XXIII)

=2月8日(月)=

- ・13:30~15:00 開会式
- ・15:00~16:30 個人発表
- ・16:30~17:30 講演 玉野井麻利子(UCLA 教授)

=2月9日(火)=

- ・9:00~10:00 講演 ピーター・ドライズデイル(オーストラリア国立大学名誉教授)
- ・10:30~12:00 個人発表
- ・13:00~14:30 講演 ポール・ハッチクロフト(オーストラリア国立大学教授)
- ・14:30~15:30 図書館見学 (Menzies Library)
- ・15:30~16:30 オーストラリア国立大学の教員紹介
- ・16:30~18:00 大学院生ワークショップ

=2月10日(水)=

- ・9:30~10:30 プレゼンテーションに関するワークショップ
- ・10:30~12:00 個人発表(テーマ別セッション)
- ・13:00~16:00 個人発表
- ・16:30~17:30 講演 ガヴァン・マコーマック(オーストラリア国立大学名誉教授)

=2月11日(木)=

- ・9:00~10:30 方法論に関するワークショップ
- ・10:30~12:00 個人発表
- ・13:00~16:00 個人発表
- ・16:30~17:30 個人発表

=2月12日(金)~2月14日(日)

- ・キャンベラ空港から、シドニーを経由(一泊)して、関西国際空港へ移動

■ 2. 個人発表について ■

まず出発前の準備として、今回参加している四名のアブストラクト、発表原稿、パワーポイントの英語添削をテランス・ヤングと川端浩平が行った。また、各自3~4回の発表の練習を行い、そこで得た内容と英語に関するフィードバックを踏まえて発表資料の作成に反映させた。日本語を母語としない、あるいは日本に関する予備知識が少ないオーディエンスを想定して、発表原稿の内容やワーディング、パワーポイントの作成を工夫した。

四名の発表はプログラムの3日、4日目に行われた。前日の夜には、他の APW に参加している院

生や ANU のスタッフを招いて各自発表の練習を行い、フィードバックをもらうとともにディスカッションを行った。それらの成果をそれぞれの発表内容や資料に反映させることができた。

事前準備を入念に行ったこともあり、各自の発表は報告の内容の質やプレゼンのパフォーマンスともに非常に良い出来だった。ただし、反省するべき点としては、文脈が込み入った複雑な質問や、その反対に文脈がまったく共有されていないために議論がかみ合わないという場面もあり、それらの対応が英語によって潤滑に行われなかったことも多々あった。その場合には、ANU のスタッフ、会場のオーディエンス、川端などが補足したことにより、各自の発表内容についてのより興味深いディスカッションを行うことができた。その意味では、学会発表とは異なり、APW が大学院生に対する教育目的を掲げている同プログラムであったことは、関学の院生・研究員が発表する場としては最適のものだったといえる。

参加者の発表に対しては会場からの熱心な質問が寄せられた。各自3~6の質問を受け、それぞれに対応するとともに、15分という短い時間では伝えることのできなかった、各自が取り組んでいる研究や問題意識を伝えることができた。それぞれの発表グループでは ANU のスタッフがコーディネーターとしてコメントを加えたが、発表内容を高く評価するコメントが多くみられた。また、院生・研究員と類似したテーマに取り組んでいる他大学の院生もおり、院生同士のネットワーキングの場ともなったことはとても意義深かった。

なお、参加者の発表タイトルは以下のとおりである。

中川千草

“The system of Conserving Resources in Japanese Lobster Fishing”

稲津秀樹

“The Identity of Latino Immigrants in the Context of Japanese Society”

谷村要

“Video Expression Practice by Internet Users in Japan”

松村 淳

“The redevelopment project after the Great Hanshin Awaji Earthquake”

○ 個人発表についての感想:

【稲津秀樹(D2)】

報告者は、開催3日目の午後から、「日本における移民集団(Immigrant groups in Japan)」と題されたセッションで報告を行った。プレゼンターは報告者を含め4人で、日本における移民の状況を難民/日系人/インドネシア人/在日コリアンを事例にあげる形で報告が行われた。

この時刻には、本セッション以外のセッションは行われなかったため、日本部会に参加していた殆どの報告者が集まっていた(目算で30名程度)。だが、司会者が時間になっても来なかったため、APWの事務局を担っていたスタッフが急きょ代役を務めることとなった。ここでタイムロスが10分程度生じたため、各報告後の質疑応答の時間は取れたものの、最後に総合ディスカッション

まで議論が踏み込めなかったのは、悔やまれるところである。

報告者は最初から2番目に報告を行った。最初の方の報告は日本の難民認定制度に関する近年の政策変更を巡る概略についてであったが、報告者の今後の研究をエンカレッジする雰囲気質疑応答が行われたので、個人的には非常に良い流れで報告に入れたと思う。また出発前にGP事務室のスタッフと数回プレゼンのリハーサルをしたのに加え、発表前夜にも追加のリハーサルを行ったことにより、当日は、緊張することなくプレゼンを行うことができた。だが、過度にリラックスしたために、(後から振り返れば)余分なアドリブを入れるなどし、報告時間を数分オーバーしてしまったことは反省したい。

報告後は、代理司会者によるコメントに加え、2,3人から質疑を受けた。いずれもANUに留学していた日本人院生からであった。内容としては、例えば以下のようなものがあった。①移民＝犯罪者と見なす社会のまなざしは、日本の事例だけに留まらないと思われるが、各国の移民状況との関係で、報告内容をどのように理解すればよいか。②日本における日系人移民の現況は、日本型多文化主義の「失敗」として捉えていいのか。③移民と犯罪との関係について、日本においてブラジル系／ペルー系以外でしばしば指摘されているエスニック集団はあるか。④日本の多文化主義の問題点を詳しく教えてほしい、等々。

これらへの応答としては、基本的に英語による返答を試みた。ただ、自身の英語力の不出来もあるが、質問者の意図を読み取れない部分もあり、意志の疎通が取れていたとは言いづらい返答も含まれていたと思われる。途中、質問者の意図を把握し損ねた返答を行い、オーディエンスとして来ていたゲストスピーカーの教授に、アシストして頂くことになった点は、個人的には今後の課題としたいところである。英語での質疑応答のリハーサルも、今後の海外発表練習の際には含めるといいかもしれない。

上に記したように、報告終了後は、総合討論の時間を殆ど取れなかったため、報告者たち4人で意見交換を個人的に行うなどし、議論を深めあうことができた。今回の報告は、英語ということで緊張もしていたものの、①国際セミナーという形を通じて、一研究者としてのネットワークを海外に広げられたこと、②英語での報告／セミナー参加により、留学のイメージが浮かべられるようになったこと、の2点が最大の収穫だったと思っている。改めて、こうした貴重な機会を提供して下さいGPプログラムに携わる先生方、スタッフの方々に心から感謝を申し上げたい。

【谷村要(研究員)】

Asia Pacific Week2010(以下APW)では、研究対象となるアジア太平洋圏の地域ごとにグループがわかれ(たとえば、Japan以外には、Southeast AsiaやChina、Indonesiaなどのグループがあった)、さらにテーマごとにセッションがなされる形式を取っていた。ただし、本報告のセッションはメディア研究が少なかったこともあってか、Japanese Studiesのグループでなく、日本以外の地域の研究者を交えたCrossover Groupsでの発表であった。そのため、オーディエンスもJapanese Studiesより多様な人々が訪れていたように思われる。

本報告では、2000年代前半における日本のインターネット状況の変化——インターネット普及

率の劇的増加と Web2.0 テクノロジーの普及——を説明した上で、その技術的背景を基盤にあらわれた事例としてダンスオフ会を取り上げ、日本のネット文化におけるコミュニケーションの一形式を論じた。ダンスオフ会ではネットの掲示板や SNS を媒介として現実空間に集まった人々が共通のダンスをともおどることを通じてつながりを深める。そして、そのつながりはネットのコミュニティ・サイトに継続していく。また、撮影されたダンス動画は動画サイトを通じてダンスオフ会参加者の外部へと拡散し、その文化のグローバルな拡散につながっている。このように仮想-現実を横断して紡がれるコミュニケーションとその影響について議論することが発表の目的であった。

本報告は、おそらくオーディエンスにとって馴染みが薄いであろう日本のネット文化や「オタク文化」に関する発表であったが、フロアには関心をもってもらえたようで多くの質問をいただいた。ダンスオフ会参加者の社会的属性(年齢、ジェンダーなど)やコミュニケーションの内容、参加者の「オタク度」の高低にいたるまで、多様な質問を受けた。なお、質疑応答においては私自身の英語力部足もあり、APW のスタッフに通訳をしていただいた。そのおかげで、事実確認については、質問の意図に沿った答えを返すことができたが、やはり「オタク度」に関してなど、より専門的な内容については不十分であったと反省している(日本の「オタク」が多元的なものであり、一概に高低で捉えられるものではないと説明したかったが十分に説明できなかった)。

また、報告のセッション終了後にもダンスの文化的起源についても質問を受けるなど、多様な研究者がいるがゆえの思いもよらない問題提起を見聞することができた。

【松村淳(M1)】

私の発表は Session8 Urban Environment というセッションにて行われた。私は震災後の再開発の特徴を阪神御影地区の再開発を例としてとりあげ報告した。震災後の再開発では共通した特徴を看取できるのだが、それがなぜ、どのように問題なのかについて報告した。

質疑応答ではいくつかの興味深い質問があった。ある学生からの質問は、近年特に建物の「耐震」が言われるようになったが、昔から日本は地震大国だったにも関わらずなぜ近年になってそれが盛んに言われるようになったのか。というものだった。

そもそも、建築基準法が制定された時期でさえ戦後になってからである。戦前は木造の低層の建物が多かったので地震によって倒壊しても直接甚大な被害を引き起こされることはない。それゆえにわざわざ建築を細かく規定する法律を作る必要はなかったのである。近年は単なる「建築物の耐震化」を超えて、震災リスクが独り歩きし過剰な法的規制が課せられることが大きな問題になってきている。

ゲストで来られていたUCLAの玉野井教授からは震災後の再開発計画において被災者はどの程度計画に参画できているのかという質問が投げかけられた。

これについては、地域によって差があり一律に述べることは難しいが、住民の細かな要望を聞くことは時間的にも予算的にも制約が大きく結果としてほとんど地元住民の要望が反映されることはなかった。

結果完成した再開発施設は焼け残った「旧市街」と鮮やか過ぎるコントラストの成し、「旧市街」

が新しい再開発施設に収奪されていくという構図が見られるようになってきている。それに抗うように旧市街に属する商店街は様々な施策を試みているがまだ目立った結果は出ていないのが現状である。

*なお、Asia Pacific Weekのプログラムの詳細については以下のホームページを参照のこと。

http://asiapacificweek.anu.edu.au/2010/participants/index.php?group_list=group&gr=Japan